千葉科学大学紀要　12．17−26．2019
【原著】

高等学校における授業の現状とこれから

− 教育改革の影響について −

Current situation and future in high school class

− The influence of educational reform −

熊谷　圭二郎

Keijiro KUMAGAI

大学進学を主たる目的として教育を行っている高等学校に焦点を当て、現在の大学受験システムを概観したうえで、これまでの高等学校の授業の在り方や教師の指導についてみるとともに、高大接続システム会議を踏まえた教育改革が高等学校にどのような影響を与えているのかについて検討した。今回の高大接続システム改革はこれまで以上に大きな改革であるため、高校現場は大きな混乱を招きながらも進んでいく可能性が高い。そのため教師は生徒がその被害者とならないよう、改革の担い手として協働しながら進めていく必要があるだろう。

1．問題

現在、高等学校への進学率は98％を超え、それに伴い能力、適性、興味・関心、進路希望等、きわめて多様な生徒が入学している。そのため現在の高等学校は、普通科や専門学科、総合学科以外にも単位制高校や中高一貫校などさまざまなタイプの高等学校が存在し、それぞれが特色ある学校づくりを行っている。そしてこのように多様化した高等学校の背景として、社会の高度化・複雑化に対応した計画的・効率的な人材育成（飯田、2007）やメリトクラシー（中村、2011）、トラッキング（藤田、1990）などが指摘されている。[1) 2) 3)]

しかし、高等学校の多様化によって学力による学校間格差（樋田、2014）が生じるとともに[4)]、各学校が抱える教育課題や生徒の実態が異なる現状となっている（耳塚、2014）[5)]。例えば、高校生の学校適応とスクール・モラールの関係について研究を行った藤原・河村（2014）は、「進学校」では学習意欲が、「進路多様校」では学級との関係が、「非進学校」では教師との関係が、他の学校タイプよりも有意に得点が高いことを挙げ、学校タイプによって学校適応の促進を目的とした援助方針が異なると指摘している[6)]。また、進学校の場合、大学受験のために知識獲得に偏りがちになり、授業においても一斉授業による知識の伝達が中心で、現行の学習指導要領が示した「習得、活用、探究」の中での「習得」場面の時間数が相対的に増える傾向がある。

このように高等学校の多様化によって学校間の違いが大きく表れている中、知識の習得以上に新たな価値を創造していくための資質・能力の育成が求められ、教育改革の必要性が指摘されている。例えば、高大接続システム改革会議（2016）では、高等学校教育改革として教育課程の見直しや学習・指導方法の改善、「高等学校基礎学力テスト」の導入などを方策としており、また、2021年からの大学入学者選抜についても「学力の3要素（“知識・技能”、“思考力・判断力・表現力等の能力”、“主体性を持って協働した学ぶ態度”）」を多面的・総合的に評価する入学者選抜「大学入学共通テスト」への実施方策を挙げている[7)]。これらの導入により高等学校におけ

連絡先：熊谷圭二郎　kkumagai@cis.ac.jp
千葉科学大学教職課程
Teacher-training Course, Chiba Institute of Science
（2018 年 9 月 27 日受付，2018 年 12 月 25 日受理）

る授業や教師による指導はどのように変化するのだろうか。そこで本稿では、大学進学を主たる目的として教育を行っている高等学校（以下、進学校）に焦点を当て、現在の大学受験システムを概観したうえで、これまでの授業の在り方や教師の指導についてみていき、高大接続システム会議を踏まえた教育改革が高等学校にどのような影響を与えるのかについて検討していきたい。

2. 現在の大学受験のシステムについて

現在、大学に進むためにはいくつかの受験機会を利用して入学試験を受ける必要があり、一般的には、大学入試センター試験（第1次試験）や国公立大学で行われる個別試験（第2次試験）、私立大学で行われる一般試験（以上3つの試験を「一般試験」と呼ぶ）、さらには推薦入試、アドミッション・オフィス入試（以下、AO入試）などが挙げられる（Figure 1 ）。

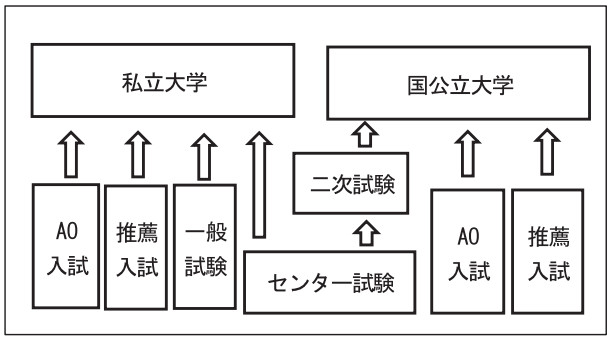

Figure 1　我が国の大学入試の仕組み

大学入試センター試験（以下、センター試験）は、1990 年から、国立大学の共同利用機関である独立行政法人大学入試センターによって実施されている。センター試験の前身である共通第一次学力試験が原則として 5 教科利用とされたこと等により、大学の序列化が顕在化したこと、国公立大学のみの入試改善にとどまったこと、受験機会の複数化の要請があったことなどを踏まえ、大学入試改革協議会において研究協議が重ねられて新たにセンター試験が実施されることとなった（大膳、2007）[8]。このセンター試験によって、私立大学も試験の成績を利用できるようになるなど、試験自体が流動性あるものになった。また、国公立大学の受験機会については、1999 年度入試から学部の定員を前期・後期に二分するとともに、合格発表・入学手続きを分けて行う「分離・分割方式」に統一された。それによって受験生にとって「①強く志望する同一の大学・学部を 2 回受験することができる等、受験できる大学・学部の選択組み合わせの幅が広いこと、②追加合格や 2 次募集の生じる余地が少ないので、合格・不合格のベースライン上の受験生が不安な状態で待たされることが少ないこと」が指摘されている（金森、1992）[9]。このセンター試験は 50 万人以上の利用があり、この試験が開始されて以来、問題の難易度は上がる傾向があり、受験科目についても増えている。

センター試験以外の一般入試として国公立大学の場合、各大学が作成した二次試験があり、国公立大学ではセンター試験と二次試験の結果を総合して合否の判断を行う。また、私立大学で行われる一般試験は、入学に必要な基礎的学力を図るための大学独自の試験で、この試験の成績のみで合否が判断される。

以上、一般入試は受験生の知識や思考力といった学力をみるものであり、高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を測っている。そのため受験生は効率よく知識を身につけ、しかもそれぞれの大学の出題傾向をおさえ、その対策を講じる必要がある。特に国公立大学の二次試験や私立大学の一般試験は、それぞれの大学で作成するために、志望する大学の問題の傾向をおさえてその対策を講じる必要がある。

これらの学力を測る一般入試に対し、推薦入試は、出身高等学校長の推薦に基づき、原則として学力検査を免除し、学業やスポーツ、芸術分野など大学が要求する特定分野の成績や調査書、面接、小論文など等で総合的に判断される。また、AO入試は、学力では測れない個性豊かな人材を求めるために、原則的には学力試験を行わず、目的意識や意欲を重視して選抜するもので、エントリーシートで出願意志を示し、その後、面接や小論文などによって入学志願者の能力・適性や学修に対する意欲、目的意識等を総合的に判定している。そのため推薦入試やAO入試といった特別入試は、学力検査を主とする入試と違って、志望理由書や自己推薦書といった応募書類に加えて、小論文や面接などを組み合わせた評価方法をそれぞれの大学が独自に行っている。これらのさまざまな評価方法については、大学が求めているものや受験生の意識など、相対的な関係性の中で考慮すべき性質が付随している（西郡、2013）ため、受験生は各大学の受験システムや出題傾向などの情報が必要となってくる[10]。

なお、AO入試開始年度である平成12年度と平成27年度の入学者選抜状況を比較すると一般入試が減少し、AO入試、推薦入試を経由した入学生が増加している（Table1）。また、入学者選抜状況の割合としては、国立大学が一般入試84.6％、推薦入試12.1％、AO入試2.7％に対し、私立大学は一般入試49.0％、推薦入試40.1％、AO入試10.5％と私立大学がより推薦入試やAO入試を重視していることがわかる（Table2）。推薦入試やAO入試における選抜方法としては、推薦入試、AO入試ともに面接を90％以上の大学が実施しているが、推薦入試の場合は小論文67.1％、高等学校の教科の評定

平均値47.1％と小論文や高等学校における成績が重視されている。AO入試については口頭試問39.4％、事前課題37.2％、小論文36.2％となっており、推薦入試と比べ選抜方式が多様となっている（Table3）（文部科学省、2016）[7]。以上のことから現在の大学入試は15年前と比べ、推薦入試やAO入試といった試験が増え、高等学校においては生徒の知識・技能の習得のみならず、多様な入試に対応できる思考力・判断力・表現力、さらには主体性を持って協働して学ぶ態度といった資質・能力についても育成する必要があると言えよう。

Table１　入学者選抜状況の比較[11]

	一般入試(%)	推薦入試(%)	AO 入試(%)	その他(%)
平成12年	65.8	31.7	1.4	1.1
平成27年	56.1	34.7	8.8	0.4

Table２　国立大学、公立大学、私立大学における平成27年度入学者選抜状況の割合[11]

	一般入試(%)	推薦入試(%)	AO 入試(%)	その他(%)
国立大学	84.6	12.1	2.7	0.5
公立大学	73.2	24.0	2.2	0.7
私立大学	49.0	40.1	10.5	0.4

Table３　推薦入試、AO入試における選抜方法（平成26年度入試）[11]

		推薦入試(%)	AO 入試(%)
各大学が実施	面接	90.6	92.9
	学力検査	24.2	5.4
	基礎学力把握検査	23.7	17.1
	口頭試問	28.6	39.4
	小論文	67.1	36.2
	レポート	1.2	15.8
	実技試験	19.6	16.9
	プレゼンテーション	3.5	29.7
	討論	3.7	13.6
	模擬講義	1.5	24.0
	事前課題	6.0	37.2
	その他	4.8	11.5
センター試験の成績(※)		9.5	4.5
資格・検定試験等の成績(※)		14.4	13.9
高等学校の教科の評定平均値(※)		47.1	35.5
その他(※)		3.9	5.2

※合否判定に利用したもの

３．進学校における教師の進路指導の実際

進学校における生徒のほとんどは大学を受験して、高等教育へ進むため、高等学校においては進路指導部の教員のみならず、教科担当やクラス担任についても進路指導は重要な役割の一つとなっている。先に見てきたように推薦入試やAO入試のように生徒の資質・能力を測るため多様な選抜方式が用いられ、その割合も増加しているが、高等教育で学ぶ上で基礎学力は欠かすことができない。文部科学省（2016）によると、推薦入試やAO入試においても、学力把握措置を実施している大学は国立大学で100％であり、公立大学が80％、私立大学においても７0％を超えている（Table4）[11]。そのため進路指導においてまず重要となってくるのは、生徒の基礎学力の定着である。大学入学を希望する生徒の多くが学力を重視する一般入試を受験するため、教科担当は授業において効率よく、生徒の学力を一定水準までもっていく必要がある。そのために40人程度の学級集団を対象に一斉授業による統制的な指導を行うことで、計画的・系統的な知識の伝達を図り、学力の定着を図っている。このような一斉授業の場合、ある学力水準を中心にして授業を進めるため、一部の生徒は学習内容に物足りなさを感じ、また一部の生徒は学習レベルの高さからついていくことができなくなる。そこで放課後や休み時間を利用して教師が生徒のレベルに合わせた講習や個別指導を行うことで、それらの生徒の不足している部分を補っている。また、国公立大学の二次試験や私立大学の一般試験については、それぞれの大学により問題の出題傾向が異なるため、受験校別の講習を行ったり、個別に添削指導したりしていく必要がある。そこで教科担当は生徒が受験を考えている大学の入学試験を分析し、その出題傾向をおさえた上で添削などの個別指導を行っている。

Table４　国立大学、公立大学、私立大学における学力把握措置の実施の割合[11]

	国立大学(%)	公立大学(%)	私立大学(%)	大学全体(%)
推薦入試	100	91	82	85
AO 入試	100	83	70	73

一方、推薦入試やAO入試の場合、学力検査を主とする一般入試と違って、志望理由書や自己推薦書といった応募書類の指導とともに、その大学で実施される面接や小論文、プレゼンテーションといった指導も必要となる。これらの入試では「学力の3要素」で言えば、“思考力・判断力・表現力等の能力”、“主体性を持って協働して学ぶ態度”といった資質・能力の育成が必要となる。また、これらの資質・能力を測る選抜方式は、大学がどのような生徒を求めているのかといった大学側のねらい

をおさえた上で、能力や資質が多岐に渡る生徒たちに合わせて個別の指導を行う必要がある。西郡（2013）は「面接試験、書類審査、小論文といった評価方法は、テストで測る「学力」という客観的な基準というよりも、大学が求めているもの、それに対する受験生側の考え方など、相対的な関係性の中で考慮すべき性質が付随している」[10] と指摘しているように、教師は大学が求めているものを把握するためその大学に関する情報を集める必要があるとともに、それぞれの生徒の資質・能力を把握したうえでどのように指導を進めるといいのかといった指導の質も求められている。

また、現在の受験システムは細分化されるとともに、その年度によってセンター試験の難易度や各大学の入試倍率、選抜方式など入試に関する情報は毎年のように変化する。佐藤（2013）が、「『志望校を決める』以前に、教師も親も生徒も『受験制度を理解する』ために頭を悩ませなければいけない時代」[12] と指摘しているように、常に新しい入試情報をおさえなければいけない現状がある。つまり、入試情報の不足は、受験生の合否と大きく結びついているのである。平成20年12月23日の読売新聞においても「入試の多様化悩む教員」と題して、「生徒の進路指導に悩む教員が9割も達している」と報じている[13]。担任を含め、進学校に務める教員は大学入試に関してかなり多くの情報を集める必要があるため、大学入試センターの説明会や予備校などが主催する説明会などにも参加し、積極的に情報を収集している。

さらに、近年、高等学校では明確な教育目標を設定するために数値目標が立てられている。たとえば、東京都教育委員会では「都立高校改革推進計画・新たな実施計画（概案）」（2002年）において全ての都立高校で、目指す学校像を明らかにし、教育活動の目標、具体的方策及び数値目標を示した計画を策定するとしており、大学進学についても具体的にどの大学に何名を目標にしているのかといった数値目標を掲げている[14]。長澤（2013）が指摘しているように数値目標の設定は教育的な効果を上げるのに役立つことも多いが、学校としての目標が全面的に経営という視点で出てくることは大学入試を間違った方向に導いてしまう危険性もはらんでいると言えよう[15]。

以上のことから、現在、進学校の教師に求められていることは、①効率よく学力を引き上げる一斉授業形式の教科指導力、②生徒の能力に合わせた個別指導力、③大学ごとの出題傾向に合わせた大学別教科指導力、④推薦入試やAO入試に対応できる資質・能力を育成するための指導力、⑤受験に関する多様な情報収集力、⑥受験生の大学進学に関する数値目標の達成である。これらの力をつけるため進学校の教師は、研修会に参加したり、自身で情報を収集したりして指導力を高めている。

4．現在の生徒の学習に対する意識

現在の高校生の学習に対する意識はどのようなものだろうか。

民間企業が行った学習基本調査（ベネッセ教育総合研究所、2015）では、2001年、2006年と縮小していた高校生の学習は、量的に拡大し、まじめに勉強に取り組む生徒が増えている（Table5）[16]。その要因として寺崎（2016）は、課題や宿題を出すなど高等学校が生徒の学習に積極的に関与し、学校生活へ彼らを取り組もうとする働きがあることを指摘している[17]。また、調査の結果、高校生の意識としていい成績をとっていい大学に進学し、いい仕事について幸せになるという価値観の復活がみられる（Table6）。さらに推薦入試やAO入試を希望する生徒は2006年度の調査と比較し、大幅な減少がみられる（Table7、Table8）。このことに対し寺崎（2016）は、学習への熱心な取り組みを学力選抜というかたちで正当に評価してほしいという態度の表れで、よい学歴をめぐる受験競争の圧力が再び高まっているが、焦燥感や疲労感までいっていないことを挙げ、このような学習動機の高まりの背景としてキャリア教育の浸透を指摘している[17]。キャリア教育とは一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることである。このキャリア教育という将来を見据えた教師の働きかけにより、早期に合格が決定してしまい、その後、学習意欲を失いがちな推薦入試やAO入試の受験希望者が減少し、再び学力を重視する一般入試を重視する傾向が表れてきたということであろう。

一方、授業方法については「先生が黒板を使いながら教える授業」「ドリルやプリントを使ってする授業」と

Table 5　平日の学校外の平均学習時間（学校偏差値帯別）[17]

	55 以上 (分)	50 以上 55 未満(分)	45 以上 50 未満(分)	45 未満 (分)	全体平均 (分)
2015 年	119.1	84.5	65.5	44.6	84.4
2006 年	105.1	60.3	62.0	43.2	70.5
2001 年	98.8	67.0	56.8	38.2	70.6
1996 年	108.8	86.6	70.0	54.7	77.8
1990 年	114.9	112.1	89.2	49.5	93.7

いう伝統的な授業方法が主要であり、パソコンやタブレットを使ってする授業は減っている。能動的な学習の実施率として「テーマについてグループで話し合う」「友達の意見を聞いて自分の意見と似ている点や違っている点を考える」「グループで話し合った内容をまとめる」などの協働的な学習活動は半数を超えており、「インターネットを使って何かを調べる」「どのように調べればよいかを考える」などの個人的な学習についても半数程度実施している。特にこれらは偏差値が高い学校ほどよく行っていることが明らかであり（Table 9）、高等学校においても能動的な学習が増えてきていることがわかる。

では、能動的な学習に対する意識を海外の高校生と比較した場合、どのような結果になるのだろうか。高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書（国立青少年教育振興機構、2017）[18] の日、米、中、韓の比較調査によ

Table 6　学力観・学習観[17]

	2015年(%)	2006年(%)	2001年(%)	1996年(%)	1990年(%)
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	46.9	48.6	45.3	56.2	47.6
どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい	28.0	31.7	27.9	27.8	34.2
できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい	67.0	58.7	54.9	51.4	54.3
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	13.8	22.7	23.6	27.2	25.6
今は勉強することが一番大切なことだ	28.4	21.9	19.5	23.9	25.4
そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう	8.6	10.6	10.7	12.5	なし

Table 7　大学入試方式の希望[17]

	2015年(%)	2006年(%)	2001年(%)	1996年(%)
できれば推薦入試やAO入試で	28.7	40.4	39.1	39.6
できれば一般入試で	69.2	57.4	58.2	54.7
無回答・不明	2.1	2.2	2.7	5.7

Table 8　学校偏差値帯別における推薦・AO入試を希望する割合[17]

	55以上(%)	50以上55未満(%)	45以上50未満(%)	45未満(%)
2015年	13.5	22.8	45.5	62.5
2006年	26.3	34.3	64.0	66.0
2001年	24.9	37.3	53.7	70.4
1996年	20.5	34.1	45.9	63.0

Table 9　能動的な学習の実施率（学校偏差値帯別）[17]

		全体(%)	55以上(%)	50以上55未満(%)	45以上50未満(%)	45未満(%)
個人的	インターネットを使って 何か調べる	55.3	57.9	57.5	55.8	47.7
	どのように調べればよいかを考える	48.5	50.5	49.9	46.5	45.6
	観察・実験や調査などで 考えを確かめる	38.0	38.1	39.9	35.5	37.9
	調べたことを文章にまとめて提出する	35.7	35.6	41.6	33.3	31.4
	自分の関心にあった学習テーマを決める	31.1	30.7	34.5	27.7	31.2
	自分の考えを図表や写真などを使って表現する	26.7	26.4	30.8	26.7	22.4
協同的	テーマについてグループで話し合う	61.5	72.0	60.2	55.7	51.4
	友だちの意見を聞いて 自分の意見と似ている点や違っている点を考える	57.0	67.2	55.7	52.2	45.9
	グループで話し合った内容をまとめる	56.7	65.0	56.9	51.2	48.1
	学習のまとめをみんなで発表する	35.1	39.8	37.7	32.5	26.2
	グループで活動をふりかえって何が良かったか悪かったかを考える	24.4	24.2	30.2	21.9	20.3

ると日本の高校生の勉強の仕方は能動型の得点が4か国中最も低く、「自分で整理しながら勉強する」「できるだけ自分で考えようとする」「教えられたとおりに勉強する」「参考書をたくさん読む」「勉強したものを実際応用してみる」「教わったことをほかの方法でやってみる」が米中韓に比べて低い。また、授業の進め方については「教科書に従って、その内容を覚える授業」が多い反面、教具の活用、生徒個人の調べや生徒同士の話し合いの授業が米中韓に比べて少ないことが指摘されている。さらに授業中の態度や行動について、日本の高校生は「授業中、きちんとノートをとる」が多く、「グループワークの時には積極的に参加する」「授業中、積極的に発言する」は4か国中最も低く、「授業中、居眠りをする」は4か国中最も高かった。以上のように以前と比べると我が国の高校生は能動的な学習を行うようになったが、海外と比較した場合、依然として能動的な学習は少なく、授業中に積極的に発言したり、協働的に学習に参加したりといった学習態度はあまり見られないことがわかる。佐藤ら（2013）が進学校の授業の風景として受動的で、無気力とも思える生徒の様子を描いていたがまさにその状況が依然として見られるということであろう[19]。

しかし、このように学習に対する能動性や積極性が低い一方、学校生活に対して「楽しい」と回答している生徒は4か国中最も高く、学習や学校生活で大切だと思ことに対しては「積極的に部活動に参加すること」を「とても重要」と答えた生徒は47.9％と4か国中最も高く、「クラスのリーダーになること」「将来に備えて、今はしっかり勉強しておくこと」「勉強したものを実際に応用すること」「先生の指導に従ってしっかり勉強すること」「先生を尊敬すること」については4か国中最も低い数値となっている。つまり、日本の高校生にとってクラスでの授業や生活、教師との関わりよりも部活動での活動が重要となっていることがわかる。

5．「受験は団体戦」

このような状況の中、進学校では「受験は団体戦」という言葉が言われるようになってきた（倉元、2013）[20]。受験は本来、個人戦である。一人ひとり目指す大学は異なり、個人の努力が合否に反映される部分が大きい。し

Table 10　勉強や授業について[18]

		日本(%)	米国(%)	中国(%)	韓国(%)
勉強の仕方	試験の前にまとめて勉強する	69.3	69.0	48.4	56.4
	できるだけ暗記しようとする	45.0	80.5	27.7	48.2
	自分で整理しながら勉強する	38.8	55.0	50.4	47.1
	問題集でたくさん練習する	35.0	41.0	33.5	26.6
	できるだけ自分で考えようとする	33.3	61.8	64.9	34.0
	教えられたとおりに勉強する	23.7	73.6	34.5	51.9
	毎日こつこつと勉強をする	17.6	19.0	23.0	23.4
	問題意識を持ち、聞いたり調べたりする	12.3	34.5	52.7	10.4
	参考書をたくさん読む	10.4	14.0	50.3	24.4
	勉強したものを実際に応用してみる	10.2	65.5	34.2	14.5
	方法や過程より結果がわかればいいと思う	9.6	25.8	20.6	10.7
	教わったことをほかの方法でもやってみる	7.5	45.8	25.9	10.4
授業の進め方	教科書に従って、その内容を覚える授業	92.2	36.9	93.5	79.5
	生徒によく発言させる授業	68.7	81.8	86.9	53.8
	いろいろな教材や教具を使って教える授業	25.0	46.4	68.9	32.1
	タブレット、電子黒板、動画などを活用する授業	15.3	85.1	87.2	67.6
	個人で調べたり、まとめたり、発表する授業	16.6	62.0	44.9	28.5
	グループで課題を決め、考えたり調べたりする授業	11.9	28.8	57.1	34.9
	学校外での見学や体験をする授業	5.3	10.5	29.1	13.7
授業中の態度や行動	授業中、きちんとノートをとる	79.4	60.8	67.7	50.8
	出された宿題をきちんとする	49.1	65.5	71.2	49.9
	授業中、先生の話をよく聞く	45.9	41.5	64.0	58.9
	グループワークの時には積極的に参加する	25.3	68.1	45.4	54.2
	授業中、ボーッとしている	15.8	21.5	5.5	5.6
	授業中、居眠りをする	15.0	3.8	3.3	8.4
	予習、復習をする	12.1	27.7	32.3	14.8
	授業中、積極的に発言する	3.7	14.9	17.2	15.6
	授業中、勉強以外の本を読む	1.7	16.9	1.8	14.3

かし、いつからか進学校では「受験は団体戦」という言葉が使われるようになり、学校現場で広がっている。高等学校の進路指導を担当する佐藤（2013）は、「大学受験の生徒には『センター試験の時までは団体である』ということはよく言う。協同の意識を持った上で集団の中で一つの目標に向かい『二次試験も含め、踏ん張って他人をしっかり応援できるように』そんな意味で使う」[12] と述べている。推薦入試やAO入試は一般入試と比べ、早い時期に実施されるため、早期のうちに合格を決め、受験勉強から離脱する生徒もいる。また、無理な努力はせずに今の実力に見合う大学を選択する柄相応主義（竹内、1991）の生徒もいる[21]。西郡（2013）が指摘するように受験生にとって周囲の雰囲気がもたらす影響力はとても大きく、生徒同士のライバル心がうまく機能すればその相乗効果は計り知れないものとなるであろう[10]。しかし、合格が決まっている生徒や受験勉強に向けて意欲を示さない生徒がいた場合、周囲の雰囲気は受験生にとってマイナスに働く可能性がある。進学校で、十分な学力保証ができないうちに合格が決まってしまう推薦入試やAO入試といった特別推薦が敬遠される（大谷、2013）[22] のは、センター試験や一般試験に向けて頑張っている他の生徒への影響力が少なくないと考えるからであろう。また、大学生の学習観を調査した三保・清水（2011）によると、一般入試で入学した学生は推薦入試で入学した学生よりも主体的に学習を進め、推薦入試で入学した学生は、一般入試で入学した学生よりも授業に対して単位の取りやすさを求めていることを指摘している[23]。以上のことから佐藤（2013）が指摘しているように、センター試験までは団体戦としての意識を持ち、すでに合格が決まっている生徒や柄相応主義の生徒が受験に向けての雰囲気を崩さないようにするために「受験は団体戦」という言葉を掲げているのであろう[12]。倉元（2013）は「大学入学率が向上する中で『入試が多様化し、受験生が個人に解体されていく』ほど、ある意味皮肉なことに、それに対するカウンターアクションとして『受験は団体戦』化していくのは必然的かもしれない」と述べている[20]。

6．これからの大学入試

センター試験は2019年度の実施を最後に廃止され、これに代わり2020年度から「大学入学共通テスト（以下、共通テスト）」が行われる。現行のセンター試験に関しては「知識の習得状況の評価に優れている」「問題を分析的に思考・判断する能力の評価に優れている」と評される一方、「複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考・判断の能力や、その過程や結果を表現する能力の評価については更なる改革が求められる」「文章を書くこと、図を描くことなどを解答に含む問題は出題しにくい」ことが指摘されている[7]。そこで、新たに行われる共通テストでは「複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめるための思考力・判断力やその過程や結果を表現する力などを評価できるよう、マークシート式問題の一層の改善を図るとともに、自ら文章を書いたり図やグラフ等を描いたり式を立てたりすることを求める記述式問題を導入する」としており、英語に関しては4技能（読む・聞く・話す・書く）を評価することになっている。実際、2017年11月に実施された共通テストの試行調査（プレテスト）の問題では、マークシート問題にもこれまでとは違った出題傾向がみられた。例えば、国語の問題で言えば、資料と会話文をもとにそれらを読み取ったり、意見を考えたりする設問が設定されており、これまでのセンター試験の問題とは異なっている。それ以外にも文章だけではなく、資料など複数の情報を提示するなどの「思考力･判断力･表現力」をみようとする意図はみられるが、「知識・技能」が必要となってくる問題も設定されている。文部科学省は「知識・技能を十分に有しているかの評価も行いつつ、『思考力・判断力・表現力』を中心に評価する」と述べているように、共通テストでは「学力の3要素」の「思考力・判断力・表現力」を重視していることがわかる。

また、共通テスト以外にも個別大学における入学者選抜改革として文部科学省（2016）は、「『学力の3要素』を多面的・総合的に評価する入学者選抜への改善」「多様な背景を持つ受験者の選抜」「入学者選抜で学力の評価が十分に行われていない大学における入学者選抜の改革」を挙げており、大学入学者選抜が、『学力の3要素』の育成に向けて、高等学校における指導のあり方の本質的な改善を促すよう改革を進めている[7]。

7．これからの高等学校における授業

文部科学省（2016）は、高等学校教育改革の具体的方策として①教育課程の見直し、②学習・指導方法の改善、教員の指導力の向上、③多面的な評価の充実などを挙げている。①の教育課程の見直しとして、全ての生徒が共通に身につけるべき資質・能力を明確化し、必履修教科・科目等の改善を図るとともに、教科・科目間の関係性を可視化することを挙げている[7]。また、②の学習・指導方法の改善、教員の指導力の向上としてアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行うことの必要性や高等学校教員が、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学びを重視した教育が展開できるよう、教育の養成・採用・研修の各段階を通じた抜本的な改革を行うことを指摘している。③の多面的な評価の充実としては、「学力の3要素」をバランスよく育成するため、指導の在り方と一体となって、評価の在り方を見直すことが必要だとし、生徒の資質・能力の多面的な評価

を推進し、指導の改善を図ることを挙げている。

つまり、文部科学省は、これまで知識・技能の習得に重点が置かれがちであった高等学校の授業を大きく変え、知識・技能の習得だけではなく、答えが一つに定まらない問題に対して自ら解を見出していく思考力・判断力・表現力、さらには主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度も育成する教育に変えていこうとしているのである。

この他、高等学校においては「高等学校基礎学力テスト（以下、基礎学力テスト）」の導入も検討されている。高等学校の多様化などにより基礎学力の不足が全国的な課題として明らかになり、それを受けて高等学校段階の基礎学力の定着度合いを把握するために導入が検討されているテストである。このテストは、高校生の多様性を踏まえ、複数レベルの問題から学校や受験者が自己の必要性に合致したものを選んで受験するものであり、CBT(Computer-Based Testing)を導入し、インハウス方式（学校内に配備されているコンピュータを活用）で実施する。出題については「学力の3要素」のうち、基礎的な「知識・技能」を問う問題を中心としながら、「思考力・判断力・表現力」を問う問題をバランスよく出題するものである。つまり、大学入試問題では「思考力・判断力・表現力」を重視する問題にして、高校現場では基礎学力テストを行うことで「知識・技能」の確実な定着を図ろうとするものである。

以上の点を踏まえれば、今後、高等学校における授業ではこれまで通り「知識・技能」の習得が求められるとともに、「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を育成することが求められているということになるだろう。なお、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関しては筆記試験や技能試験によって評価しにくい資質・能力であるため、日々の高等学校の学習活動等を通じて多面的な評価を行うものとされ、また大学入試においては、個別大学の入試選抜において各大学独自の評価方法とともに適切に組み合わせて評価することが期待されている。

８．高大接続システム改革による進学校への影響と課題

1985年の臨時教育審議会「教育改革に関する第1次答申」において「21世紀に向けて社会の変化に対応できるようとくに必要な資質、能力は創造性や自ら考え、表現し、行動する力である」「これまでの我が国の教育は、どちらかと言えば記憶力中心の詰め込み教育という傾向が強かった」と指摘し、共通一次試験を廃止し、センター試験を導入した[24]。2016年の高大接続システム改革会議「最終報告」においては「先行き不透明な時代であるからこそ、多様な人々と協力しながら主体性を持って人生を切り開いていく力が重要になる」「新たな価値を創造していくための資質や能力が重要になる」「現状の大学入学者選抜では、知識の暗記・再生や暗記した解法パターンの適応の評価に偏りがちである」と指摘しており[7]、30年前の状況と類似している。しかし、今回の改革は、大学入学者選抜だけでなく、さらに一歩踏み込んで高等学校教育改革も含んだものであり、これまでのものと大きく異なることがわかる。「最終報告」の中にも「この教育改革は、幕末から明治にかけての教育の変革に匹敵する大きな改革であり、それが成就できるかどうかが我が国の命運を左右するといっても過言ではない」と評し、文部科学省が新たな社会における「生きる力」を子どもたちに身につけさせるために、大きな教育改革を推し進めようとする強い意志が感じられる。

しかし、その一方では、教育改革を進めるうえでいくつかの課題も挙げられる。まず一つは「教師の負担の増加」である。今回の改定では「学力の3要素」を育成することがねらいとされているが、大学入試が多様化するにしたがって高校現場ではすでに「知識・技能」の習得のみならず、「思考力、判断力、表現力」、さらには「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の育成も少なからず取り組んできた。特に、進学校においては身につけさせるべき知識が多かったため、よりよい一斉授業とは何かを探る一方、個別指導によって「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の育成を行ってきた。改革によって今後、アクティブ・ラーニングによる授業実践が行われるようになるだろうが、これまで通り、知識・技能をつけさせながら、他の学力をこれまで以上に向上させるためには、教師自身の自己研鑽が求められるであろう。多くの仕事を抱えている中、改革に向けて研鑽する時間や場をどのように確保していくか、十分に検討していく必要があるだろう。

また、もう一つは「学力の3要素」の一つである、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の育成についてである。これまでの授業は、効率的に知識の伝達を図るために、一方的で画一的な教師中心の授業スタイルであった。田村（2015）が、「教師の指示ばかりを受け続けている子どもは、いつしか受け身で、自ら考え判断することのない子どもに育ってしまう可能性がある」と指摘しているように[25]、これまでの授業は生徒中心の受容ではなく、一斉授業によって知識の伝達を図るものである。生徒は主体的に授業を受けるというよりも、教師の指示のもと受動的になりがちであった。特に大学入試の場合は、限られた時間内で受験に対応できるだけの知識・技能は不可欠であり、しかも多様化した大学の受験システムに関する情報は膨大である。今後、アクティブ・ラーニングで授業を進めることが増えていく

だろうが、大学受験に関するノウハウを持っている教師による一斉授業や情報伝達はこれからも必要であろう。また、「多様な人々と協働して学ぶ」というのも現在の高校生は苦手としている。文部科学省（2011）も、現在の子どもたちは人間関係が希薄となり、異質な人々によるグループ等での課題を解決することが苦手であったり、回避したりする傾向があることを指摘している[26]。また、我が国の高等学校は同年齢で、学力が同程度、興味・関心も似ている集団となっている。同質の集団において仲の良い友人と交流してきた生徒にとって多様な人と協働して学ぶということに対して少なからず抵抗感を感じていると思われる。

９．教育改革にむけての対応

以上、現在の大学受験システムを概観したうえで、高大接続システムを踏まえた教育改革が高等学校にどのような影響を与えるかをみてきた。では教育改革が進む中、高等学校はどのように対応したらいいのだろうか。

まず一つ挙げられるのはチームとしての学校づくりである。文部科学省（2015）は「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」において「チームとしての学校」が求められていることを指摘し、「専門性に基づくチーム体制の構築」、「学校のマネジメント機能の強化」、「教員一人一人が力を発揮できる環境の整備」の3つの視点に沿って施策を講じていくことの重要性を指摘している[27]。しかし、これらを実現させるためにはまず教員組織づくりが不可欠ではないだろうか。河村（2017）は教員組織の状態として3つのレベル7つのタイプがあることを指摘し、教員組織が教育の成果を大きく左右することを指摘している[28]。河村は教師の自主・向上性と同僚・協働性の必要性を指摘しているが、既に多くの負担を抱えている教員がこれ以上の教育成果を上げるためには自己研鑽という自主・向上性だけではなく、同僚・協働性も高め、互いに補い合い、支え合うことで無駄なものを減らし、効率的に仕事を進めていく必要があるだろう。

また、二つ目に挙げられることは教師自身の省察的な実践である。文部科学省は今回の教育改革について幕末から明治にかけての教育改革に匹敵する大きな改革と指摘している[7]ようにこれまでの教育のあり方とは大きく変わる可能性が高い。そこで現場に立つ教師は、知識の厳密な適応によって実践を行なう専門家（技術的合理性モデル）ではなく、暗黙のうちに依拠する自分自身の枠組みそのものを問い直しながら、新たな認識・判断・行為を見出していく専門家（省察的実践モデル）となる必要があろう（Schön、1983）[29]。教育改革は学校現場に大きな戸惑いをもたらす。しかし、生徒たちの前に立つ教師は、日々の実践を省察しながら、現状において何がよりよいのかを考えて実践していく必要があろう。

三つ目としては教科外活動の充実が挙げられる。これまで高等学校では大学受験や就職等に向けて知識・技能の習得が求められてきた。しかし、今後、「学力の3要素」の一つである「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を育成するためには、総合的な学習の時間や特別活動といった教科外活動がより重要度を増してくるであろう。特に高等学校における特別活動はこれまで生徒の自主性に任せることが多く、計画的・系統的に生徒の資質・能力を育成してきたとは言い難い。平成30年に公示された高等学校学習指導要領解説特別活動編においてホームルーム活動で、課題解決に向けた話し合いや合意形成を図る活動の実施が取り上げられ、学習過程まで示されている[30]。今後、協働的な活動が多く含まれる教科外活動を充実させることは新たな教育を進めるうえでより重要度を増してくるであろう。

以上、教育改革に向けた対応として3点指摘したが、今後、教育改革に対する学校現場の対応については様々な場において検討が重ねられていくだろう。しかし、大きな改革だけにすぐに解決できるものでないと思われる。そのため高等学校における教育改革は試行錯誤を重ねながら、緩やかに進んでいく可能性が高いのではないだろうか。特に今回の教育改革は、入学者選抜や授業の進め方も変えていこうとするものであり、文部科学省が指摘しているように幕末から明治にかけての教育改革以来の大きな改革である。倉元（2012）は急な変化は混乱を巻き起こすと指摘しているが[31]、今回の教育改革は大きな混乱を引き起こす可能性が高い。しかし、これまでとは異なる新しい社会で生きていく生徒たちを考えた場合、それをも見越し、覚悟した上で取り組んでいく必要があるだろう。この改革を進めるにあたって被害者になるのは生徒たちである。その被害を少しでも小さなものにするためにも、教師はこの改革の担い手の一人として責任を持ち、省察的に進めていく必要がある。とくに今回の改革は教師にとっても大きな負担となることは予想される。それだけにチームとしての学校づくりを意識して、多くの人を巻き込み、協働しながら進めていく必要があるだろう。

引用文献

1） 飯田浩之　2007　中等教育の格差に挑む　―高等学校の学校格差をめぐって―　教育社会学研究、80、41-60.

2） 中村高康　2011　大衆化とメルトクラシー　―教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドックス―　東京大学出版会

3） 藤田英典　1990　社会的・教育的トラッキングの柵造　菊池城司編　現代日本の階層構造③教育と社会移動　東京大学出版会　127-154.

4） 樋田大二郎　2014　変わる高校生活と地位達成の仕組み―メリトクラシーとトラッキング構造のその後―　樋田大二郎・苅谷剛彦・堀健志・大多和直樹編著　現代高校生の学習と進路　学事出版　10-21.

5） 耳塚寛明（2014）．多様化の中の質の保証―高校教育政策の新局面―　樋田大二郎・苅谷剛彦・堀健志・大和田直樹編著　現代高校生の学習と進路　学事出版　136-142.

6） 藤原和政・河村茂雄（2014）．高校生における学校適応とスクール・モラールとの関連―学校タイプの視点から―　カウンセリング研究、47、196-203.

7） 文部科学省　2016　高大接続システム改革会議「最終報告」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf（2018年8月閲覧）

8） 大膳司　2007　戦後日本における大学入試の変遷に関する研究（１）―臨時教育審議会（1984～1987年）以降を中心として―　広島大学高等養育研究開発センター大学論集、38、337-351.

9） 金森越哉　1992　大学入学者選抜の改善について　民主教育協会　IDE現代の高等教育、338、62-64.

10）西郡大　2013　受験生心理からみる大学入試　東北大学高等教育開発推進センター編　大学入試と高校現場―進学指導の教育的意義―　東北大学出版会　27-66.

11）文部科学省　2016　大学入学選抜改革に関する資料 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_04_2.pdf（2018年8月閲覧）

12）佐藤忠司　2013　東日本大震災被災校の奮闘―困難の克服と日常の回復に向けて―　東北大学高等教育開発推進センター編　大学入試と高校現場―進学指導の教育的意義―　東北大学出版会　113-126.

13）読売新聞　2008　入試の多様化悩む教員　平成20年12月23日朝刊

14）東京都教育委員会　2002　都立高校改革推進計画　新たな実施計画（概案）―日本の未来を担う人間の育成に向けて― http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/administration/action_and_budget/plan/reformation/files/new_plan/3ji_gaiyo.pdf（2018 年 8 月閲覧）

15）長澤武　2013　変わりゆく教育環境の中で、問われる大学入試　東北大学高等教育開発推進センター編　大学入試と高校現場―進学指導の教育的意義―　東北大学出版会　189-225.

16）ベネッセ教育総合研究所　2015　「第５回学習基本調査」報告書　[2015]　https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4862

17）寺崎里水　2016　新しい“受験競争の時代”の到来―学習の量的拡大と質的変化―　ベネッセ教育総合研究所　「第５回学習基本調査」報告書　[2015]　32-42.

18）国立青少年教育振興機構　2017　高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書―日本・米国・中国・韓国の比較― http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/114/（2018年8月閲覧）

19）佐藤学・和井田節子・草川剛人・浜崎美穂　2013　授業と学びの大改革「学びの共同体」で変わる！高校の授業　明治図書出版

20）倉元直樹　2013　総括と展望―「受験は団体戦」の意味　東北大学高等教育開発推進センター編　大学入試と高校現場―進学指導の教育的意義―　東北大学出版会　227-234.

21）竹内洋　1991　日本型選抜の探究―御破算型選抜規範―　教育社会学研究、49、34-56.

22）大谷奨　2013　大学入試の多様化と進路選択・進路指導　東北大学高等教育開発推進センター編　大学入試と高校現場―進学指導の教育的意義―　東北大学出版会　7-26.

23）三保紀裕・清水和秋　2011　大学進学理由と大学での学習観の測定―尺度の構成を中心として―　キャリア教育研究、29、43-55.

24）臨時教育審議会　1985　教育改革に関する第1次答申

25）田村学　2015　授業を磨く　東洋館出版社

26）文部科学省　2011　子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取り組み～の審議経過報告のとりまとめ

27）文部科学省　2015　チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）

28）河村茂雄　2017　学校管理職が進める教員組織づくり　図書文化社

29）Schönm, D. A. 1983　The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action, New York: Basic Books（柳沢昌一・三輪健二監訳（2007）．省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考．鳳書房．）

30）文部科学省　2018　高等学校学習指導要領解説　特別活動編

31）倉元直樹　2012　大学入試制度の変更に伴うスケジュール問題の構造　東北大学高等が教育開発推進センター編　高等学校学習指導要領VS大学入試　東北大学出版会、53-89.